

IV-76

住民意識を考慮した資源調査に関する研究

——地域開発のテーマ設定のために——

宇都宮大学大学院	学会員	青田 浩光
宇都宮大学	正会員	永井 護
パシフィックコンサルタン	正会員	丹羽 隆泰
福島県庁	正会員	浜津 威彦

1. はじめに

近年各地域において、個性の創造や観光の視点からの町づくりが、活発になってきている。しかし、画一化した施策が多く見られ地域の風土や住民の生活・思考様式を有効に活用した事例は非常に少ない。これからの地域開発に於ては、これまでの様に地域を形づくっている各種資源の様々な特性を、もの（物理的資源）からのみ判断するのではなく、更にそこに住まう人との関わりを考慮して評価することが、重要と思われる。以上の観点より本研究では、地域に根ざし一度失えば再興が難しい自然・歴史的資源である河川・杜寺・城跡を対象として、住民意識を考慮した資源評価の方法を検討することを目的としている。

2. 研究の方法

本研究では、図-1に示す意識構造を想定し、これに基づいて研究を進めている。特にイメージは、資源に対する住民の関わりである経験・知識・行動に基づくものと考え、評価項目の設定に際し配慮した。そして、これらの要因が、身近さ及びシンボル性の評価につながるものとしている。

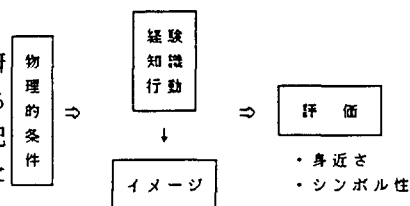


図-2に、本研究のフローを示す。①対象とする資源を抽出し、自治体の職員に対し意識調査を行う。②アンケート調査に基づき個資源の評価及び説明要因（経験・知識・行動、イメージ）中の調査項目間の連関（評価構造）を把握する。③評価構造より、各資源の特性を示す代表的説明項目を求める。④資源調査項目を設定した後、現地調査を実施し、資源別に評価構造に現れた資源特性をあらわす物理的尺度を抽出する。⑤以上の手順を踏まえて資源調査のための調査項目と調査方法を検討する。

3. 意識調査及び資源調査の概要

対象地域は栃木県下の11市町村（1市町村毎3資源）とし、各自治体の職員20名に訪問留置法によるアンケート調査を行った（回収票660）。調査項目は、評価項目としての“身近さ”“シンボル性”を含め説明要因中の項目と個人属性とからなる42項目を設定した。現地における資源調査は、地図上及び現地での観測と記号化による図面作成からなる。

4. 評価構造に関する分析

経験・知識・行動に関する項目とイメージに関する項目それぞれに対し、主成分分析を適用した。これらより抽出された項目に対して、評価に関わる規定要因の分析を行い、さらに代表的な説明項目を選ぶ為に、数量化Ⅰ類を用いた。選定された各資源の代表的説明項目は表-1に示す通りとなった。

5. 意識評価に基づく代表説明項目と資源調査項目との連関

図-3は、杜寺の資源別の評価値であるが、同様の評点を与えられた“大雄寺”と“追分地藏尊”を例

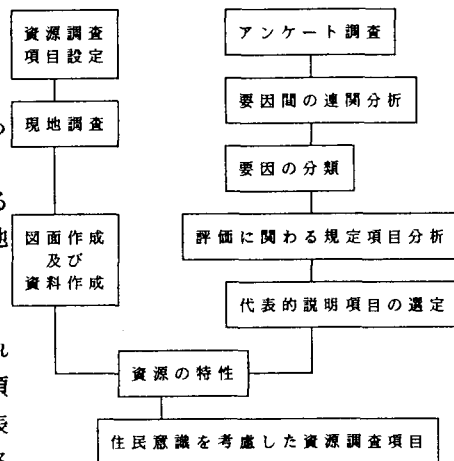


図-2 本研究のフロー

証する。図-4は、数量化Ⅰ類によ

表-1 資源別代表項目

る要因分析のウエイトを代表項目ごとに示したダイアグラムである。これを、現地調査に基づいて作成された図面に対応させて評価すると次の様になる。まず、"T1"は豊

	美しい 汚い	希少性有 無	雄大な こじん まり	活気有 無	逸話有 無	田園的 都会的	心地よい 不快な	散歩する しない	整備された 未整備な
社寺	T1	T2	T3	T4	T5				
河川		R1	R2			R3	R4	R5	
城跡	C1	C2	C3	C4		C5			C6

富な樹木や建物の質に、"T2"は文化財の有無や境内面積に、"T4"は参拝者の数や建物の数に、"T5"はその有無に関係があることがわかる。その点において、"大雄寺"の場合は"T1" "T2" "T3"が高いのは、比較的長い参道を有し、樹木も豊富であり、かやぶき屋根の建物や文化財が多いためと考えられる。一方、"追分地蔵尊"は"T2"が高い。評価内容こそ多少異なっているが、日光方面からみると、道路が分岐する地点に真正面に位置していると言う大変シンボリックな存在であるために、同様の評価が得られていると思われる。この様に、見かけ上資源に対する評価は同じであってもその内容の違い 言うなれば地域性の差異が、以上の様な作業によりその断片を明らかにすることができ得るのである。総括すると次の様になる。

社寺に関する5つの代表的説明項目をまとめて物理的特性から見てみると、"T1"は豊富な樹木や建物の質に、"T2"は文化財の有無や市街地・道路との位置関係に、"T3"は参道の有無や境内面積に、"T4"は参拝者数や建物の数に、"T5"はその有無に寄るものと思われ、同様に河川を見た場合、"R1"はやなや釣り場の有無に、"R2・R4"は河川幅に、"R3"は周辺
▽大雄寺
▽追分地蔵尊
の土地利用や河川幅に、"R5"は市街地との位置に関係していると思われる。城跡に対しては、"C1"は城跡からの眺望に、"C2"は土塁・石垣などの有無に、"C3"は市街地と城跡の標高差や眺望に、"C4"は人工施設の利用状況に、"C5"は周辺土地利用や城跡からの眺望に、そして、"C6"は人工施設の有無と利用状況に関係があると考えられる。

また、代表項目のうち"整備——"は城跡に、"逸話——"は社寺に、"心地よい——、散歩——"は河川に対してと、各資源の特性に応じた説明項目が表れてきているのに対し、"雄大な——"希少性——"はどの資源に対しても共通項となっているのは興味深い。

6. まとめ

- (1) 意識評価の上から、各資源に共通な項目及び資源特性に応じた項目が抽出できた。
- (2) 意識構造を物理的特性で説明するときの説明項目である資源調査項目が、かなり絞られてきた。
- (3) 住民の資源評価に関する基礎に資源調査を行うことによって、以上の知見が得られ、都市開発におけるテーマ設定の為に有効なアプローチであるとの見通しがついた。

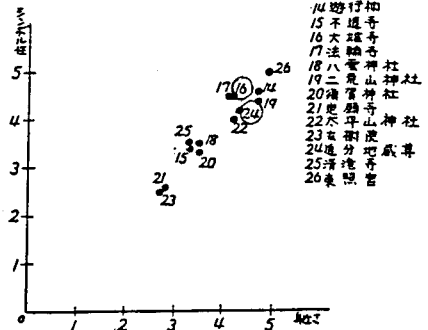


図-3 資源別評価値

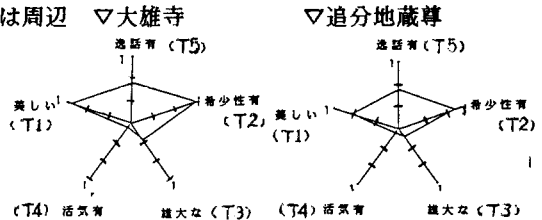


図-4 代表項目ダイアグラム

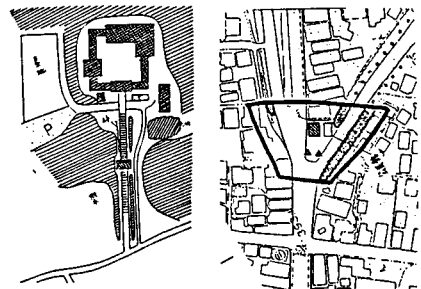


図-5 個資源の図式化